

正宗白鳥「人さまさま」論

瓜 生 清

国語科(昭和61年9月1日 受理)

はじめに

小説「人さまさま」^{注1}(中央公論「大10・9」)は、白鳥の自筆と推定される諸年譜^{注2}に述べられているとおり、大正七年「人生に対する倦怠」と「執筆難」との挾撃にあえぎ、翌八年には、意を決して郷里に隠棲しようとして果さず、ついに大正九年再び上京するという大きな曲折を経た白鳥が、家郷という残された退路を断念し、この重大な作家的危機に正面から対峙し直そうとした作品である。発表時、作品の意図を存分に論じた批評は少なく、文芸時評の中に言及が見られる程度である。しかし、数少ない葛西善蔵、徳田秋声らの時評^{注3}によると、これが発表されるや、文壇内で好評裡に迎えられるという反響の大きさを伝えている。いわば、白鳥は「人さまさま」の発表によって、依然文壇の現役の大家として健在であることを広く印象づけることが出来たのである。

秋声はその時評で、「人さまさま」で問われている主題の重さを直観的に看取しているが、それはまさにこの小説にかけた白鳥のなみなみならぬ発問の切実さに関連する。例えば、大正十年度の自作を総括した

「新潮」恒例のアンケートへの回答「何れも苦心慘憺の作」(「新潮」大10・12)に徴すれば明らかである。この自注によると、「人さまさま」の執筆には格別の「苦心」と「全力」の傾注を要しており、私生活の断片を無造作になぞった身辺雑記小説ではなかったことになる。しばしば自作への嫌悪をかくさず、やや反語的ではあるが、「興味もない創作熱もない」(「文章世界」明41・11)という題のアンケート回答文を發表しているそれまでの白鳥にしては、かなり気負った自己評価と云ってよいのである。前記の簡略な自筆年譜を見ると、白鳥の自注の確かさを裏づけるように、「人さまさま」は長篇「冷涙」(「婦人公論」大10・11~12)と並んで大正十年の項に掲げられ、この期を代表する創作と見做されているのである。

このような白鳥の自己評価、位置づけにかかわる「全力」を要した問いとは一体何であったのか。この観点から先に紹介した同時代評を眺めると、秋声の次のような見解は、小説の核心を端的に「感想小説」であると断じ、白鳥の「人生観」が「総勘定された観」があるという位置づけにまで及んで、現在でも顧みられるべき鋭い批評眼を示した論として

大変興味深い。

私が最近に読んだものでは、正宗君の「人さまざま」などは可なり評判になつたやうである。あの作品なども、正宗君のものとしては決して傑出したものとは思はなかつたがつまり感想小説であつて正宗君のこれまでの作品に現はれない人生観と云ふもの全部が、あの作で総勘定をされた観のある点で、興味のあるものであつた。

秋声はその他、以上のような作品評価をふまえて、次のような鋭い人物月旦を展開している。「正宗君の冷たいやうな胸の底には人生に対する非常な愛が潜んでるんだとも云へる、さういふ点では正宗君は必ずしも人生の否定者だとは云へない。」この白鳥観は、同時代の論者が一様に白鳥にニヒリスト、虚無的世界観の文学者という安易なレッテルを貼るのに終始し、内面の懷疑と超克という精神のダイナミズムを見落しており、平板な論調に終わっていたのに比べて、はるかに適切、柔軟な理解を示した出色の言であつたと評してよからう。

現在の論評を瞥見すると、佐々木徹氏^{注4}のように、「人さまざま」を含め、この時期に顕著な小説と随筆との境界が判然としない作風を、「単なる身辺雑事のとりとめない報告」と見做し、白鳥を「生ぬるい生をむさばっている作者」であると批判を浴びせる論者もいる。しかし、この評価は、この期の創作全般に下した概括としてはともかくも、「人さまざま」の理解に限定すれば、全く当を得てはいまい。他方、秋声の理解と共鳴する視点に立つ論者として、兵藤正之助氏^{注5}が、「小説の道行がともすると沈潜の気配の濃厚な人生論的な随想の中に姿を没するかにみえてまた現われる」という手法上の変化に着目し、そのよつて来たる必然的要因を「生きる上での問題解決を迫られる思いに終始していた」白鳥の内面を掘り下げることから解きほぐしてゆこうとしているアプローチこそ、

この小説を解明する上で有効であろう。本論では、特に「感想小説」の内容を具体的に検討し、白鳥の思索をあげての発問がいかに「総勘定」されようとしているかという作品の位置づけにまで論及してみたい。

1

「人さまざま」の評価は、大正期後半の文壇の動向を反映して、私小説の文学的伝統化という趨勢を前提にして論じられたのである。例えば前述の葛西善蔵の時評は、不惑を越えてなお潑刺としている強靱な「心の持方」について、「羨望の念」を禁じたいという頌辞を捧げているのである。小説への関心を、作家の人格の修養、心境の錬磨という観点に集中させる論議は、葛西流のロジックであるというだけではなくて、前述のような私小説をめぐる情況の反映にほかならない。確かに、「人さまざま」の作風は、実生活に対して、同心円上の相関関係から大きく飛翔することはない。作中、回想によって再現される旅から流浪する主人公の生活、小説の現在においても、依然所々を転々とする一所不住の生活は、年譜と照合するまでもなく、大正九・十年の白鳥にそのまま一致している。しかし、このことから「人さまざま」を時流に便乗した方法意識の欠如した無構成な私小説であると見るべきではない。このことは、以下、前記自注の「工夫」「全力」の語と作品との関係を明らかにしながら述べてゆく。

「人さまざま」の第一章冒頭は以下のように書き出される。「秋の末から春先きまで、眺望のいゝ貸別荘に住んでゐた高山夫婦は、借受けの期限の切れたのを機会に、一先ず大磯を引上げることにした」。なんの愛哲もないプロローグのようである。しかし、期限切れ後、早速あらたに「空家捜し」(一)を始めなければならない主人公「高山」の近年が、

「根を据ゑて落着ける家がなくなつて、あちらこちらを転々としてゐる浮草のやうな生活」(一)であるのは、いささか異様な一所不住と言ふべきであらう。一見、彼の生活実態は、気儘な遊行者のようであるが、それは、生きる上での「根」となるもの、前途に対する確乎とした「自分の方針」(八)を見失つていふと言ふべきである。「根」を喪失しているために非定住者を強いられる人間は、当然精神の動揺のままに所々を転々とする「浮草のやうな生活」を繰り返さずしかあるまい。冒頭から提示される「住所不定の生活」(六)は、主人公の生の根拠となる「方針」の未確定状態を暗示する導入部であつたのである。

このプロローグによって示された「高山」像の内面は、第一章で昨今の「旅から旅へ渡る」(一)動静を回想を使って再現する条によって一層明確にされてくる。

海の眺めよりも山の眺めを好んでゐる彼れは、甲信の山地に親しむたびに清心な刺戟を受けて、懶い眠りから醒めるやうな気持がした。輕井沢の高原に住んでゐた間に屢々そんな気持がした。富士の晩秋の裾野を旅して、精進湖畔の見窄らしい宿に泊つて、雨中の半日、宿の窓から紅葉の山を見詰めてゐた時、寂寞の靈気が周囲の山の底にも、彼自身の心の底にも動いて、曠悲焦燥の煩惱も一時掻き消されるやうな気持がした。鰍沢から富士川を下つて身延の靈域に辿り着いて、独り御草庵の遺跡に立つて、蒼鬱たる樹間から、暮れかゝる空を仰いだ時には、宗教心に乏しい、ことに日蓮宗の如き者を好まない彼れでも、宇宙に動いてゐる尊い者の前に跪きたいやうな気持がした。(常住の住家である里へ下ると、直ぐに昏乱して、一日の安き心もなく、心に何の光をも見られないのが不断的の彼れの習ひではあるが。)

この引用文から、「高山」を「常住の住家である里」では成就しがたい

「清新な刺戟」を渴望し、究極の「安き心」を志向する現世厭離者であると規定してさしつかえない。そのため、脱出衝動の行方は、常に「曠悲焦燥」の根源である「里」から遠く隔てられた、俗塵を蟬脱するかのやうな「靈氣」を感じさせる「山地」が選びとられなければならないのである。

しかし、そこがいかに俗界と様相を異にする「靈域」のようであらうと、他力的な非日常的空間への脱出は、いまだ前途の「方針」の未確定な精神の昏迷に対して、眞の治癒になるはずもなからう。自己への問いかけによって、それが解決を見ないかぎり、「高山」の常態となつていゝる「懶い眠り」「焦燥」は、「醒めるやうな^(傍点)氣持」「一時掻き消されるやうな^(同上)氣持」といつつかの間の緩和に終わらざるを得ないのである。すると、第一章の旅にあげられる回想部分は、「高山」が以下「旅」といふ退路を遮断して、現世の「里」において精神の背反を越えようと試みる小説展開上に必須な背景であり、起点的な意味を持つていゝると言えよう。そして、「高山」が「旅」に求めた超克の志向は、以後「信仰」<死>等についての感想録風の思索に変奏されながら、結末の“Anywhere, anywhere out of the world” (十一)という詩句において受けとめられる構成になつてゐる。つまり、懷疑とその超克という問いかけが、小説の構成に慎重に呼応させられてゐるのである。それでは、主人公に「高山」といふネーミングが与えられた理由は、「山の眺めを好んでゐる」といふ好尚に関連するの言うまでもないが、単に脱俗の境涯を求める「東洋的な隱遁精神」^(註)の体現者であるという説明では十分ではあるまい。すでに述べたやうに、「高山」の志向は、「里」を離れた「靈域」を彷徨することからも明らかになつた。その底流に劇的な回心を渴望する方向にあつた。そうすると、この呼称は、生死の解ききたい謎を前に

して、究極の解答は何であるかという思念を内に秘めた超克者の謂が、仮託されたものであると理解すべきであろう。換言すれば、白鳥は「高山」像に、キリスト教信仰を喪失して以来の、懷疑と信仰という内面の垂直的な背反を今一度措定し、問い直そうとしたのである。

さて、仮住いの家を失ったため、当座妻の実家へ寄寓することに決め、あわせて義弟の婚礼に出席するという「俗用」(一)を果たすために、車中の人になった「高山」は、すでに「里」という煩瑣な日常へ回帰する途上にある。偶然同乗した老人が「癩病患者」(二)ではないかという疑念にかられた「高山」は、旅という非日常に脱出することで得た「清新な刺戟」を瞬時にして「昏乱」へ陥らせる。「里」の実相を、「身延の深敬病院で見た患者の顔や、沓掛で見た草津行の患者の馬上の姿」を重ねることで把握するのである。以下、「里」へ刻々と帰還してゆく「高山」が人間の生の実相に下した感慨は、現世厭離者の想念に照応して陰惨を極めている。

瓜 患者同志で笑ひ戯れてゐる病院の廊下こそ、人生の真の姿であるやうに、彼れは感じてゐるのであつた。さまざまな人間の平素の饒舌も、病院の廊下の気晴らしの戯れと同じやうに彼れには思はれてゐた。あれもこれもこの世の中の出来事であるのに関らず、劇場の舞台よりも饗宴の席よりも、あるひは花嫁花婿の相並んだ美しい姿よりも、瘦馬に跨つた草津行の患者の状態に、一層多くの人生の真実が現れてゐるやうに、どうかすると、彼れは思つてゐた。

社会外の人間として疎外される患者の運命を、人生の真相を凝結させた「人間のいたましさ」として極北に置き、そこから現世の様々な理念、生の悦楽を「気晴らしの戯れ」であると相対化しているのである。ここに、いかにも白鳥的な人生を虚妄と見るシニカルな認識が語られて

いる。しかし、それは「人さまざま」の主題、及び白鳥文学の展開から見れば、一切を諦観した揺るぎのない冷徹な認識として語られようとしているのでは決してあるまい。例えば、「むくれた顔のくづれかけたやうな患者」を例にして示された認識の方法は、様々な異形を構図の中に配置した小説「妖怪画」(趣味)明40・7)との類縁関係から考えることが可能である。醜悪な現世の欲望の縮図として異様なまでにデフォルメを加えられた異形の図に、激しい呪咀と糾弾の精神を託す方法は、「妖怪画」を最も顕著な道標とし、白鳥初期文学のアクチュアルな対現実へのかかわり方を示している。その「妖怪画」に震撼させられた広津和郎が、ニヒリスト白鳥という理解が通念と化してゆく中で、「氏の絶望否定の底には、醜悪ならざるものを求むる靈魂の叫びがある」という理想主義的な観点から鋭く捉えかえす出色の作家論を発表しているのは周知のことである。癩患者を借りた「人さまざま」の感慨は、「妖怪画」のような現実への激しい憤怒を示していない。現世の実相観を諦観的に語るために例示されているのである。ここに「妖怪画」との大きな相違点があり、理想主義的な現実糾弾のモチーフの沈静化があるのは否定できない。しかし、前記の広津和郎の見解を視野に入れるならば、癩患者に触発された感慨は、懷疑と超克という垂直軸に沿う背反を内面の基本構造にする「高山」が、生の「方針」の未確定状態のために、懷疑精神の優位を結果したために、その下降感によって現世を照射した感慨であると見るべきであろう。

このような「高山」の目には、作中現世の負の認識に盲目である「さまざまな人間」(二)は、「奇怪不可思議」(三)な異邦人のように映らざるを得まい。再度「里」へ帰る「高山」の周辺に登場する人物はことごとくそうである。「家」の觀念の牢平さを巨細に婚礼の慣習を踏襲す

ること示している義父を始め、遊惰な生活の中に自己を喪失している資産家の蕩児「尾越」と「おくめ」の内縁関係や、肉の誘因によって動かされている女中「おきく」とその前夫など、現世の平面図を生きる人間が、超克者「高山」の独自の思念の有り様をあざやかに描きだすため作中に配置されているのである。

2

結納から結婚にいたるまで、煩瑣な「儀式のための儀式」(三)に頭を痛める義父、準備に忙殺される家人の中で、義務としての「俗用」を眺めている主人公が唯一無用の人間であることは言うまでもない。一大盛事が進行する中で、無聊な時間に投げだされた「高山」は、第四章で旧知の老牧師について突如懐旧の思いを湧きあがらせる。ここに、現世の晴れの饗宴とは無縁な、それを超えるものを志向する主人公の重大な問いにかかわる問題が明らかにされているのである。

高山は退屈さまして二階で地図を披いて、未見の土地を空想してゐた。人間や超人の事をいくら考へて見たつて、生れながら持つてゐる自分の智慧はとづくに行き詰まりになつてゐて、新しい心の世界の開展する望みのないことを熟知して来た彼れは、身辺の事がもつと自由になつたら、未見の土地を巡遊して残生を送りたいとよく考へてゐた。海外の地図をも屢々注視してゐた。長崎島原などを経て、薩南の湯の町揖宿に暫らく居を定めて見たいと思つたこともあつたし、日向の茶臼ヶ原の孤児院を訪ねて見たいと思つたこともあつた。その孤児院には、少年時代の彼れを愛撫して、基督の道を単純平明な言葉で伝へた昔の田舎牧師が老後の生涯を送つてゐる筈なので、高山はお互ひがこの世に生きてゐる間に、一度その牧師に会ひたいと思つてゐた。

引用部の前半には、人生の真相を癩患者の姿から照射した懷疑精神へ下降する主人公らしい、いかにも「退屈」へ拡散した日常と、「行き詰まり」を自覚した残余の人生に対する諦観が表わされている。勿論、この諦観に達するまでには、その経過として、恒常的な関心を「人間や超人」の説いた死生への覚悟に向け、それを試金石としながら劇的な「新しい心の世界の開展」の願望があつたのは言うまでもない。しかし、ついに生の「方針」となる確信を手中に出来なかつた「高山」に残つたものと言へば、冒頭第一章の、回想で再現された「旅」のヴァリエーションとして、「未見の土地」を「巡遊」する漂泊の誘いしかあるまい。だが、引用部の後半は、未見の候補地にあげられた「日向の茶臼ヶ原」が、かつて少年時代の彼に「基督の道」を諄々と説いた「田舎牧師」に因むことから、「湯の町揖宿」などの無聊を解消する遊行先とは同列に論じられない。

前記第四章の引用文は、信仰という確信を喰ひ破られ虚妄視しなければならなくなつた主人公と、「単純平明」に説いた福音伝道を揺ぎのないものへ高めていった篤実な「牧師」との人生の暗明が著しい。しかし、懷疑と信仰という二人の際立つた対照は、全く交差することのない永遠の平行関係であるとして投げだされているのではあるまい。なぜなら、「高山」が残余の人生を諦観して生きようとしている人間であるならば、事ここに至つて、「かの牧師の今の有様はどんなであらうか。」などと、安否を越えたこだわり方を示したり、牧師の説きすすめた「肝心な事」が未だに不明なままであることを告げるため、わざわざ訪ねてみたいなどと考えるのは、極めて笑止な感傷であり、初めから想起されるはずもなからう。

この条に、唯一注目して興味深い論を展開されたのは兵藤正之助氏^{註8}で

ある。氏は、昭和三十七年、世人を驚倒させた信仰告白にいたる白鳥とキリスト教との関係を念頭において、「昔の田舎牧師」との親和と慈愛の関係を追想する条に、白鳥の「キリスト教への郷愁」が表明されていると考えている。確かに鋭い着眼眼であるが、兵藤氏が、晩年の信仰告白に「少なからぬ関わり」を持つとまで推断された「牧師」について、若き日の白鳥に聖書講義を授けた岡山孤児院長石井十次であると考えているのは、明らかに誤認である。この誤認は、「牧師」の存在が白鳥の信仰告白にまでいかなる水脈として流れ続けていったのかという重大な問題もさることながら、「人さまさま」の意図を解明する当面の課題から見ても看過できないのである。先に結論を示すと、この「牧師」に該当する人物は、「生きるといふこと」(『毎日宗教講座』昭33・1)などの回想で知られる、白鳥の郷里に近い岡山県和気郡香登村のキリスト教講義所で彼を信仰に導いた同志社出身の牧師溝手文太郎である。白鳥は溝手の紹介によって石井十次の知遇を得たのである。

瓜 生 清

以下、出来るだけ煩雑な論究を避け、この兵藤氏の見解が事実誤認である論拠を示しながら、「人さまさま」において、白鳥の懐疑を超克する模索と「キリスト教への郷愁」がどのように展開されようとしているかという要点に絞って言及する。「牧師」の語は、作中四箇所に見られる。石井十次は篤信の人、情熱的な信者ではあるが、牧師の資格を有していない。このことを白鳥は承知していたであろう。石井に言及した白鳥の回想は、「上京当時の回想」(『文章世界』大3・7)の早い例から、前記昭和三三年の「生きるといふこと」まで、かなりの数にのぼっている。だが、いずれの資料も石井を「牧師」であると述べた例は見いだせない。白鳥が熱烈なキリスト教信仰時代を経て来ている経緯から考えても、按手札によって任職される「牧師」と信者との区別について不明の

ままであった筈もないのである。第二点は、「人さまさま」の本文中にある「牧師」の体軀に関する表現が論拠になる。石井についての詳細な伝記である西内天行の『石井十次信天記』(警醒社 大7・3)によると、石井は「六尺大の常陸山式の体軀を有する」と伝えられている。それは、「人さまさま」の「瘦せさらばいてゐたかの牧師」という表現とくいちがっており、石井とは明らかに別人物である。第三は、「牧師」は健在であると回想されているが、石井は大正三年一月三十日、宮崎県児湯郡の茶臼ヶ原で死去しているのである。中道にして倒れた石井の死は、同月三十一日の「東京朝日新聞」に、「岡山孤児院長 石井十次逝く」という見出しで大きく報じられている。当時、白鳥が同紙の購読者であり、絶えず読んでいたことは「日常生活」(『大阪朝日新聞』大3・6・21)「軽井沢日記抄」(『文章世界』大9・10)等の資料によって明らかであるので、白鳥はこの旧知の人物石井十次の死去について承知していたはずである。

ところで、若き日の白鳥と溝手との関係、及び溝手のその後の閱歴については、勝呂奏氏の論文が注12かなり綿密な詳しい調査を報告している。二人の関係は、明治三四年以降、長らく音信が杜絶えたままになっていたが、大正九年、白鳥と溝手との間に音信のやりとりが復活するのである。このことを裏づけるのが小説「縁談」(『文芸春秋』大14・6)である。白鳥伝の一齣を明らかにするにあたっては、小説の記述を無批判に論拠とすることは出来ないが、これは身辺雑記風の私小説であり、事実関係の大綱に大きな改変は加えられていない。「縁談」は、婚期を逸しかけていた白鳥の末妹清子が、奇しき因縁と評すべきであろうが、溝手の長男と結婚することになった意外な報告に端を発し、それ以前から始まっていた白鳥と溝手との交流の復活、及び三十年ぶり二人が劇的な再会を遂げた日にまで遡って感慨を深くする小説である。白鳥が溝手

と音信をかわすまでの経緯について、「縁談」は次のように述べている。

園田吉太郎といふのは、大井が少年のころ師事してゐた田舎の牧師で、その口から、神の恵みや人の罪やキリストの救ひについて、いろいろに聞かされたのであつた。西洋の小説に出て来るやうな素朴な単純な田舎牧師が連想された。牧師は他郷へ移り、大井は上京して、殆んど三十年間も消息を絶つてゐたのであつたが、数年前大井は何かのはずみでふと、その牧師のことを思ひ出したので、故郷の耶穌信者に牧師の住所を訊き合せて、一片の手紙に添へて舶来のビスケットを贈呈した。

引用文中の「数年前」の年時は、以下のことから大正九年であると推定できる。作中「牧師」は「歡喜に溢れたやうな返事」の中で「明年」上京する予定であり、その折の再会を楽しみに待つと伝えて来る。そして、翌年の「紅葉の美しい晩秋」三十数年ぶりで互いに無事を喜びあつた時、「園田吉太郎」(溝手)の年齢が「六十五歳」であつたことが明示されている。前記勝呂奏氏の論文によると、溝手の生年は一八五六年(安政三年)であるから、これによると、大正九年に書信の往復が始まり、翌十年の「晩秋」に二人が大磯で劇的な再会を果たしたことになる。

それでは、同年九月に発表された「人さまざま」を書き続けている白鳥の心中には、遠からず上京する溝手のことが絶えず意識の一半にのぼり続けていたのではないか。このことは、「人さまざま」の三ヶ月前、「死の怖れをも罪の恐れをも知らなかつた十二三歳前の幼い時代」への快い追憶にふける小説「春の夢」(『野依雑誌』大10・6)に、溝手のことが「頭の毛の薄い瘦せた老人じみた、人のよさゝうな牧師」として回想されていることから十分推測が可能であろう。白鳥は「人さまざま」で、上京間近い溝手の温顔を記憶の中から思いおこしながら、かつ

て彼に「基督の道」を説いた篤信の人と懷疑者という差異をみつめ、その交差する交点は可能かどうかを問おうとしたのである。

問題は要するに、白鳥の心中に自然とその風貌を刻印した溝手を通して、白鳥の懷疑と信仰がいかに見つめられていくかであろう。そのためには、溝手を回想する小説に見える一貫した表現に注目しなければならぬ。「基督の道を単純平明な言葉で伝へた昔の田舎牧師」という表現に看取される「人さまざま」の溝手観は、その他の作品において「人のよさゝうな牧師は、殊勝な少年として私を歓待して、諄々として道を説いた」(『春の夢』)、「西洋の小説に出て来るやうな素朴な単純な田舎牧師」(『縁談』)など、いずれも同義語に近い表現で反復されているのである。これら「単純」「素朴」という語は、いずれもその信仰を愚昧な迷妄として否定し去ろうとするものではない。この表現は、前記勝呂論文^{注14}が「神を求むる者の自然な信仰心を育み、理性によるキリスト教理解よりも、靈的体験に巧みに導く篤実温顔の士が想像される。」と述べている溝手の信仰のあり様を、白鳥が直観したものとなつて見えてよからう。それは、信仰という一つの確信が、これほど質朴なあり様で美しく体現されていることに、白鳥は強い羨望の思いを禁じがたかつたことを物語るものでもあろう。

このような白鳥のキリスト教への郷愁は、香登のキリスト教講義所で溝手によって導かれ、「自然な信仰心」を育んだ一人の老信者について、東京専門学校卒業論文で取りあげて以来、「人さまざま」と同月に発表された「影」(『国粹』大10・9)以後、「空想の天国」(『群像』昭22・12)前記「生きるといふこと」「現代つれづれ草」(『文学界』昭32・4/12)など、最晩年まで彼の胸奥にいくたびも蘇っている回想と類縁関係が認められることから証明できる。エッセイ「影」には、晩年「懷疑」「不

安」に包まれて死んでいったフロベール、ツルゲネーフと「平和な心を有つてゐて、笑つて死生の溝をも飛び越えた田舎信者」の安らかな死とを対比し、次のような結論にいたっているのである。

煩はしい疑問に多くの悩みを浪費しないで、平和な心をもつて死の扉を開けて行つたN氏の単純な信仰が羨しい。

フロベールの淋しい懷疑や、ツルゲネーフの不安な心境に共鳴する自分の濁つた心を私は憎む。……しかし私は今更どうすることも出来ない。

この懷疑と信仰の二律背反は、そのまま「人さまざま」第四章の、「田舎牧師」の信仰へ羨望の思いをかくしきれなかったにもかかわらず、結局「わが心は安んじられないのだ。」という彼岸と此岸のような溝の越えがたさを確認した表現と対応する。そうすると、「人さまざま」を書く白鳥には、キリスト教信仰を唯一絶対の真理とする確信は消失していたと言ふことは出来る。しかし、彼の中で依然として執拗にくすぶりが続いている求める心の完全な麻痺、棄却とは見なしがたいのである。

3

第七章で盛大な婚礼と披露の宴がくりひろげられる時、小説の視点の大半が、プロット上の傍系で、この章以外には全く登場しない「下女のおきく」と、その前夫で新婚の前途に「不吉の影」を投げかけるように突如現われる「蓬頭垢面の男」とにゆだねられる。その結果、視点人物である「高山」は、その役割を与えられず、不在に近いと言つてよい。このような視点の変換は、「高山」が身辺の登場人物から感慨を触発される「感想小説」的性格の著しい小説において、極めて特異な箇所であると言わなければならない。このような視点処置が生じた要因を考える

と、「高山」によって直接晴れの婚儀にいささかあくどい冷笑を浴びせることに、白鳥が義父弟の思惑をはばかったためであると考えられることも出来よう。しかし、すでに白鳥が結婚直後の妻つ欄を酷薄なまで冷淡に扱った小説「泥人形」(『早稲田文学』明44・7)を発表しているのは周知のことである。主人公重吉の冷酷さは、白鳥びいきであった広津和郎を憤激させることになった有名なエピソードを思い出すまでもなく、このような縁者への現実的顧慮によって視点を変換されたとは考えがたい。それは、先走つて言えば、第十一章で「高山」が「工夫して書いてゐる拵へ事」である創作の問題(当然それは白鳥における執筆意図に關連する)と重ねて考えるべきであろう。このことは後述する。

ともかくも、第七章の婚礼場面は、第二章の癩患者を例示することによって「花嫁花婿の相並んだ美しい姿」を虚妄視した条との呼応を意図した章であり、それが、別れた後も肉の誘因によっていつしか繕りをもどしてしまふ「おきく」と、癩患者のイメージと照応する「蓬頭垢面」の前夫とによって、「結婚といふものが、衣類や調度やさまざまの儀式に装はれないで、『結婚その者』として、あるがまゝの正体」を暴露させられているのである。いわば、プロットの展開と無関係な二人の目は、披露の宴につらなつた「高山」の「種々雑多な幸福は畢竟水の上の泡沫同様なもの」(八)という認識を別の角度から代行するものであったのである。

第四章で、垂直軸に沿う超克の志向が、旧知の「牧師」を追想する条で依然閉ざされたままである以上、「高山」は現世に生きながらえる自己の存在への疑念を一段とつらせざるを得ない。つまり、現世を厭離する「高山」が、究極の「安き心」を「基督の道」に託すことが出来なかつた時、にもかかわらず「われも人の如く、耄碌するまでも余生を貪

つてゐる外はない」(十)という現状は、社会外へ疎外されながらも「生きられるだけは生きねばならない人間のいたましさ」の符牒であった患者と、その生のあり様においてさほどの怪誕は感ぜられないのである。

そして、現実を嫌悪する脱出衝動は、とどのつまり「巴里や倫敦でなくつても、知らない土地なら何処だつていゝのだ」(九)というように、果しなく空漠として広がるばかりである。しかし、「旅」への脱出も、「氣晴し」的な一時的現状緩和にしかなり得ないことを熟知している「高山」には、超克の方向を見失っているために、常時「妄想雑念」(八)「捕捉しがない不安」(十)という不定型・無方向な感情が付随し続け、はては彼を「雑念の虜」(八)と化するのも自然な推移と言つべきであらう。垂直軸の上昇から現世の平面図へ投げかえされ、不毛な宙づりになつた不活性な生のあり様へ嫌悪の思いが嵩じた時、無慙な生へ果敢な終止符を打つ解決法として、「死」に対する親和の感情が生まれるのである。

それは、信仰とは対極的な第八章のアルツイバーセフの短篇「死」^{注15}についての感想のくだりである。「高山」は、「姑息な感情の支配を受けな^{注15}いで、理性のみによつて、自己の採るべき最良の方法は自殺であると確めて、その所説を実行した」具体例として、「アルツイバーセフ」(ママ)の『死』といふ短篇に書かれてゐる見習士官と、「動脈を切つて滴る血潮を見ながら快く死に就いたといふ『クオ、ヴァヂス』の中のペトロニウス」を思ひ出すのである。虚妄な人生を清算する方法として、死に一切をゆだねる誘惑にかられる「高山」は、信仰による淨福を懷疑した終局の結論に達したと見ることが出来る。だが、正確にいえば、この「死」に対する親和は、彼の精神の基本構造が上昇と下降という内面の背反であるため、その永遠循環のような問いの未了に精神を疲弊させた挙句、「妄想や雑念」の一つとして惹起していると見るべきであらう。

つまり、求心的な問いの放棄、拡散情況と言つてよい内面の衰弱が、「雑念の虜」と化した彼を「死」へ誘惑しているのである。であるから、本来の懷疑とその超克という背反する精神のダイナミズムから見れば、「最良の方法」としての「死」の例示が、結局、この精神の矛盾構造を解決する「實際上の感化」(八)を及ぼし得なかつた時、前述のような問いの未了状態へ彼を回帰させることになるのである。

ここでいささか煩雑ではあるが、「人さまざま」に於いて、短篇「死」がいかに取り扱われているかを探ることによつて、前記の回帰の問題を掘り下げてみたい。「人さまざま」の三ヶ月前に発表されたエッセイ「ある日の感想」(「国粹」大10・6)で、白鳥は短篇「死」について次のように言及している。

太陽が出たとか光が差したとか、欧州近代劇の結果に、意味ありげに書き添へてあるのが、私にはいかにもわざとらしいやうに思はれる。かつてアルツイバーセフ(ママ)の『死』といふ傑れた短篇を読んだ時にも、私はさう思つた。ある見習士官が自殺を以つて、人間の取るべき最も賢明なる道と信じて、ある友人にも自分の所信を述べて、計画通りに自殺を行つたのであつたが、その友人は、士官の感想に捲き込まれて同じ気持になつてゐた上に、士官の死体をも見て、死に誘はれかけたのに、朝日の光を見ると、俄かに生の悦楽を覚えて晴々したと、作者は説いてゐる。この暗明の気持は人生の真相を露出してゐて面白い。しかし、それでさへ、私には朝日の一件が小説構造の上の思ひ付きとしか思はれなかつた。人生發生以来の濃霧が消えて、晴れた朝日を仰ぐやうな気持を我々に起させるやうな芸術がどこにあるのであらうか。

少し注記すれば、引用文の「ある友人」は正確には医者であり、両者

は親密な友人関係ではない。若干作品理解に記憶の不鮮明さを残しているが、白鳥の関心の所在は冒頭から明確である。なお、救済を象徴する「太陽」「光」などが結末に配置された文学には、短篇「死」だけではなく、白鳥が生涯に亘ってその救済の結末を問題にしたトルストイ「イヴァン・イリツチの死」をも念頭に置いていたであろう（文学における『解決』是非、「朝日評論」昭21・10）。ともかくも、死生の謎という「人生発生以来の濃霧」に与えた解釈をめぐって、その「解決是非」に関心を集中させているのである。これを、「人さまざま」第八章と照合すれば、両者の視点の違いは歴然としている。三ヶ月という発表時期を隔てるだけであるにもかかわらず、同一作品に言及する視角が全く異なるのは不可解ではなからうか。白鳥生涯にわたる基調的発問は、むしろ「ある日の感想」の作品鑑賞の方に見いだされる。短篇「死」の内容、意図から見ても、その中心は「見習士官」の虚無観にはなく、死の誘惑から一転して生の愉楽へ転換する「医者」の暗から明への心理展開にあるのである。白鳥はそこへ論点を集中させ、その解決を「小説構造の上の思ひ付き」「芸術家の小細工」に終わっていると批判しているのである。ところが、「人さまざま」では、見習い士官の虚無観の帰結である自殺の是非についてのみ問題にし、医者が遭遇した死から生へという展開の相へ全く言及していないのである。

それは、「さまざま」な自殺」の一例としてあげられていたシェンキ・ヴィッチ『クオ・ヴァデイス』^{注16}と重ねて考えることで明らかになるのではないか。これら「高山」を誘惑した作品は、短篇「死」が見習い士官の〈死〉と医者への生、『クオ・ヴァデイス』が「エピキュリアンのペトロニウスの美的最後」（「さまざま」不安）、「中央公論」大13・6）とペテロの〈信仰〉という対極的な生の対照を基本にしているのである。

つまり、理性が最終的に下した〈死〉の結論は、対極の〈生〉〈信仰〉との緊張関係の中で問われ、結論的に超越されているのである。そうすると、「高山」によって短篇「死」の「最良の方法は自殺である」という判断が「小説構造の上の思ひ付き」として斥けられた時、彼はその対極の理念については何も語ってはいないが、これを書く白鳥には、死を超越する〈生〉〈信仰〉への揺りかえしがあったのではないか。このことは、「ある日の感想」が、これら死生観をめぐる芸術上の救済を、読者の意表を突いた小手先の意匠に終わっていると批判しながらも、その後「私は明い芸術を望んでゐる。与へられなくても、求める心を没却してゐるのではない。」という執拗に「文学における『解決』是非」を探ろうとしている表現が続いていることから推定できよう。

4

〈死〉から、依然未了状態の問いに回帰した「高山」は、第九章以降で、作中始めて執筆活動に専念するのである。筆硯に親しむ「高山」の姿は、彼にとって書くことの意味を語ると同時に、自ずと作者白鳥に残された懷疑と超克という課題に創作がいかにかわり得るかという問題となってくるのである。即ち第十一章において、前途の「方針」が未確定なままいたずらに生活を空費することに堪えられなくなった妻の焦燥の訴えを前にして、「高山」は次のように考えているのである。

高山は、今の仕事が終りさへしたら、自分たちの身の処分について、いゝ考へが浮んで来さうに思はれてゐた。（自分が工夫して書いてゐる拵へ事から、却つて反射的に刺戟を受けて、鈍つてゐる心が磨かれて、自分の実生活についてもいゝ分別が出て来さうに思はれてゐた。）

〈創作〉と〈旅〉の相違を問わないならば、この条が、前記第一章の「甲信の山地に親しむたびに清新な刺戟を受けて、懶い眠りから醒めるやうな気持がした」というパラグラフに類似しているのは言うまでもない。しかし、現実厭離者が空間的な移動によって得た覚醒と、書くことによって精神の背反を見つめる問いかけは、その間に受動と能動という決定的な差異があることを見逃しがたい。「里」へ帰還した「高山」は、空間を彷徨する逃避を断念し、「身の処分」という緊急の問題に自覚的に向き合わねばならない。この時、創作の意味は、第六章で義父と閑談しながら、「手を拱いて茫然として生きてゐるよりは、働き得るかぎりは勢一杯働いた方が、まだしもましなのだ」と氣をとりなおしているやうな身過ぎ世過ぎといった凡庸な処世とは異なった切迫感を増して来ざるを得ない。その結果、創作は、前に批判の矢を放った「文学における『解決』是非」をめぐる創造的営為たらざるを得まい。

作中の年立てによると、「高山」が専念している「小さな仕事」は、大正十年四月頃に該当する。しかし、白鳥の作品年表とこの「仕事」を突きあわせて、作品を特定する作業は不要であろう。彼は、文筆家として風波をしのいで来た自負心を持ちながら、「心と筆とピツタリ合ったものゝ書けたことは、これまでに殆んど一度もなかつた」(十二)と認めているように、精神の背反を見据える創作において、ことごとくそれを止揚する「文学における『解決』」に失敗し続けているのである。だが、彼が未だに創作を通じて、「鈍つてゐる心」を打破する「刺戟」を期待している姿は、白鳥が「人さまざま」において、主人公「高山」の内面を追究することに重層してくるのは当然であろう。それは、精神の昏迷状態のために、常時不定型な「妄想雑念」に包まれていた「高山」の「捕捉しがたい不安」を、〈信仰〉〈死〉という垂直軸に沿う思念の対

立、葛藤として明確に措定し直すことである。これが、「人さまざま」に言及した前記自注に見える「全力」を傾注した創作であるという自己規定にはかならないのである。このように精神の背反を明確に構造化することは、当然それに付随して、小説の細部を文学的奥行きを持った構成へいかに整えてゆくかという「工夫」にもつながってゆくであろう。第一章の回想で再現される旅人「高山」の動静は、現世を厭離する超克の志向を持つ人間像であることを明示するものである。それを小説の遠景に置きながら、「里」という現実へ回帰した彼の日常に現在の時間を定める小説の構成に、求心的に超克の可能性を探ろうとする作者の意図が窺えるのである。そして、旅において「安き心」を求める志向は、「里」における様々な思念へ屈折を経ながら、結末の英文の詩句に収束するように構成を整えているのである。その他、前述の第七章における視点の転換も、主題に奥行きを与える「工夫」の一端と見てよい。主人公の感懐を代行する視点の処理は、それが「高山」とは異質な肉の次元の人物を借りて行なわれることによって、結婚そのものの正体が、現世の平面図内で相対化されてしまい、その結果、その平面図を越えようとする「高山」の独自性が一層明確になる。ゆえに、この章の視点の問題は、縁者の思惑を気づかった一便法と考える必要はないのである。

さて、創作に没頭した「高山」は、擱筆後、訪ねて来た義父を伴って演芸場へ出かける。この小説の結末は、「感想小説」として、〈信仰〉〈死〉から〈創作〉へ展開する、彼の精神の矛盾構造にかかわる主要問題の終極点であると考えてよいのである。

一仕事終つた後で心の弛んでゐる高山も、呂昇の声に誘はれて、をり／＼首を垂れては昏睡の夢心地になりかけた。淨瑠璃の中の喜怒哀楽の声々が、遠い浮世の騒ぎのやうに幽かに彼れの耳に響いた。そして、

“Anywhere, anywhere out of the world”と云った誰れかの声が、^{注17} 彼れの力のない心の底で聞かれた。

ここには、緊迫した精神の燃焼である創作によって「刺戟を受け」、「鈍つてゐる心」から脱却しようとした試みが、結局「心の弛んでゐる高山」には、成就されなかったことを物語っている。浮世の泡沫のよな騒ぎを伝える呂昇の声に「昏睡の夢心地」を誘われる主人公の姿は、第一章の「常住の住家である里」での「懶い眠り」と類似した精神の埋没を示すものにほかなるまい。

しかし、引用部の後半の詩句に注目すれば、懶い眠りの中において、ボードレールの詩句を耳朶に聴く主人公の姿は、それが、現世厭離の脱出衝動を物語るとともに、いまだにこの浮世を越える「安き心」をへどこかに求めようとする問いを持続させているのである。つまり、前述のように、〈信仰〉から〈死〉への展開相において、〈死〉を究極の解決策として承服できなかった時、短篇「死」『クオ・ヴァディス』の〈死〉を越える作品の構図が、白鳥の中に“Anywhere…”の問いとして反響し続けていたのである。そして、それが「高山」の「力のない心の底」に響いているところに、求心的な問いかけと超克の意欲の衰弱は確かに認めるべきだが、白鳥は執拗に「求める心」を棄却していなかったのである。

最後に、この小説の位置づけについて言及すると、常住の「里」を越えようとする「高山」を描いた「人さまさま」は、「人里離れた茅屋」に退隠し、死生への覚悟をめぐって様々な魍魎と対話する「庵主」を描いて注目を集めているメタフィジカルな小説「迷妄」〔「解放」大11・5〕と表裏の関係にあるのである。「迷妄」は、「人さまさま」の〈信仰〉〈死〉〈創作〉といった「感想小説」の内容を、ぎりぎりの問いにまで濃

密化したものであって、「人さまさま」を白鳥の実生活の相に沿った問いかけの陽面とすれば、「迷妄」はまさにフィクショナルな陰面にあたるのである。勿論、切迫した「ぎりぎりの終末観」^{注18}に立たされている「迷妄」と「人さまさま」をそのまま同列視できないが、「人さまさま」は平明な私小説の作風を装いながら、「迷妄」と同様に懷疑と超克という内面のダイナミズムを正面から見据えようとした作品であったのである。そして、「人さまさま」の結末に示された果しなく続く“Anywhere”という問いは、白鳥が小説「何処へ」〔早稲田文学〕明41・1〜4〕で、「行場所に迷つた」菅沼健次の精神の彷徨を描いて以来、彼の基底を流れ続けていたのであった。「人さまさま」は、「何処へ」の彷徨をうけ、その後死の直前の信仰告白へいたる振幅の激しい道程の中で、切実な問いかけの「総堪定」を試み、問いが依然未了のままである苦渋を反映した作品として位置しているのである。

注

1 「人さまさま」は、「中央公論」の初出本文では全章数十一の章立てになっている。が、初版『人さまさま』〔金星堂名作叢書3〕金星堂 大11・3〕以降の諸種の本文は、この章数が削除されている。この章数を残している福武版『正宗白鳥全集』第九卷（昭59・10）は、解題で初版の本文に拠ると言いながら、この章数の有無について注記がない。なお、テキストは福武版全集本文に拠る。

2 「正宗白鳥年譜」〔『正宗白鳥集』現代小説全集(4)新潮社 大14・8〕

「年譜」〔『正宗白鳥集』現代日本文学全集(2)改造社 昭4・2〕

3 葛西善蔵「九月の雑誌から(四)」〔時事新報〕大10・9・27〕

徳田秋声「十年願望」〔『正宗白鳥君の「人さまさま」など』〔時事新報〕大10・11・29〕

なお、この同時代評の引用は、前記『正宗白鳥全集』第九卷の「月報 第14号」に翻刻された本文による。

- 4 佐々木徹「正宗白鳥―危機の時代―」(『茨城キリスト教短大研究紀要』(2) 昭48・3)一七頁。
- 5 兵藤正之助『正宗白鳥論』(勁草書房 昭43・12)八八頁。
なお、兵藤氏の考えと重なりながら、特に新文体の確立に目を向けた後藤亮氏は、『正宗白鳥 文学と生涯』(思潮社 昭41・7)の一六〇頁で次のような見解を示している。
- 「人さまざま」(大正十年)に到って、ようやく題材と形式と心境との油然たる新文体が確立した。(中略) 身辺に材を探り、叙事の中に自由に人生観・人間観を吐露して、随筆とも小説ともつかぬ彼独特の、いかにも自在の文体で、これが晩年の彼の作品に重量と安定感とを与えるものだ。」
この文体確立の問題については後考に俟ちたい。
- 6 吉田精一『自然主義の研究』下巻(東京堂出版 昭33・1)七九三頁。
- 7 広津和郎「正宗白鳥小論」(『作者の感想』所収、聚英閣 大9・3)二六頁。
- 8 兵藤正之助氏は『正宗白鳥・沖野岩三郎』(『近代日本キリスト教文学全集』(5)教文館 昭50・6)三三三頁の「解説」で次のように指摘している。
「白鳥は明治二十七年、十六歳、岡山市の薇陽学院在学中に石井に出会っている。この頃石井は、岡山孤児院と平行して宮崎県茶臼原に新らしい施設を開くため、同地の開拓にまで手をつけはじめていた時で、この信仰と孤児救済事業に燃えていた二十八歳の青年牧師の現実(傍点)に根をおろしたところから説かれる「彼独特の聖書の講義」(『生きる』といふこと)は、恐らく少年白鳥の心を強くうち、終生、その心の底から消えぬものではなかったかと推量されるのである。そしてさらに想像をたくましくするならば、石井十次の存在は、晩年の白鳥の「アーメン」にも、少なからぬ関わりをもつものではないかとさえ考えられるのだ。」
- 9 「生きる」といふこと」で、白鳥は自身と溝手・石井の間柄について次のように述べている。
「私の郷里から二里ほど隔つてゐる所には、一団の信者があつて、小さな講義所を設け、伝道師も雇はれてゐたので、私はそこを訪れて、キリスト教についていろいろ質問をして教へを受けた。この伝道師の紹介で、岡山の孤児院の石井十次院長から彼独特の聖書の講義をきくやうにもなつた。」
なお、右の引用に見える「伝道師」は、明治三十年十一月十二日付正宗教
- 夫宛書簡、「二十歳の日記抄」(『群像』昭27・1)などに「溝手」の実名で出てくる。
- 10 西内天行『石井十次 信天記』(警醒社 大7・3)五三三頁。
11 「日常生活」(『大阪朝日新聞』大3・6・21)に「新聞はこの頃朝日と万朝と報知と読売とを取つて居りますが、その四種の新聞の記事は電報でも講談でも相場表でも殆んど残らず読み通します。」と述べており、「軽井沢日記抄」(『文章世界』大9・10)には、「朝日は東京で生活したる間は絶えず読んでゐる」とある。
- 12 勝呂泰氏は、「正宗白鳥とキリスト教―受洗前の体験に即して」(『キリスト教文学研究』創刊号 昭58・5)の五六頁で、次のような調査結果を報告している。
「白鳥との交際は在郷時に一層深まり、上京後も書信によって、また休暇に帰省した間に保たれ、明治三四年頃までは少なくとも密接に続いたと考えられる。(中略) 溝手も明治三七年まで香登に働いたが、神戸教会に移り、一度香登に戻つた後倉敷教会へ行き、石井の孤児院宮崎県茶臼原移転に従つて高鍋教会へ移つていった。」
- 勝呂論文は、溝手がいつ頃高鍋教会の牧師になつたかについて明らかにしていない。岡山孤児院の収容児童が茶臼ヶ原へ本格的に移住させられるのは明治末年である。勝呂論文によると、それに従つて溝手が高鍋へ移つたことになる。しかし、柴田善守『石井十次の生涯と思想』(春秋社 昭53・10)三五一頁によると、『信天記』の著者西内天行が明治四二年から大正七年まで、高鍋教会および岡山孤児院茶臼原分院の教会牧師となつて、周辺に伝道していたとある。これによると、溝手が西内にかわつて高鍋教会を牧するのは大正七年以降とも考えられる。
- 13 白鳥の末妹清子について、諸年譜等は再縁先(山尾氏)については記述しているが、溝手家に嫁したという興味深い事実については、いずれにも言及がない。唯一、大岩鉦氏が『正宗白鳥論』(五月書房 昭46・9)一八頁で、「清子さん(溝手牧師の長男に嫁し、夫に死別し、姫路の神官山尾氏に再婚し、現在未亡人)」という指摘をしている。なお、この結婚の時期は、小説「縁談」によると関東大震災後から大正一四年の間であつたらしい。
- 14 前掲勝呂論文五七頁。
- 15 白鳥がアルツイパーセフ「死」を何によつて読んだか明らかでない。ある

いは、鷗外が「学生文芸」(明43・9)誌上に訳載、のち『諸国物語』(国民文庫刊行会 大4・1)に収録した訳文のいずれかによったか。

16 平岡敏夫氏は「正宗白鳥『何処へ』」(『日露戦後文学の研究』上、有精堂 昭60・5)の二〇〇頁で、白鳥における『クオ・ヴァディス』体験と小説「何処へ」との関係について次のように述べている。

「ペテロの「何処へ行く」という問いかけを切実に記憶しながら、なおかつ、イエスを容易に見出しえぬ苦惱。「何処へ」の健次、すくなくとも作者白鳥の心内にあったものは、『クオ・ヴァディス』のペテロのように問いつつも、なおかつ答えを見出しえず、ただただ問いつつねばならぬ(何処へ)であったはずなのである。」

この見解は、第八章で例示された『クオ・ヴァディス』が、「人さまざま」の思念の曲折において、どのように機能しているかを説明するにあたり示唆的である。

17 この詩句は、ボードレルの『パリの憂愁』第四章「この世の外へなら何処へでも(Anywhere out of the world)」である。

18 前掲大岩鉉『正宗白鳥論』一五〇頁。

付記

石井記念友愛社理事児島誠一郎氏には、石井・溝手について貴重な御教示を賜わった。ここに深甚の謝意を表す。英文の引用詩句の出典は、九州大学の清水孝純先生から御教示いただいた。記して厚くお礼申し上げる。